

目次

第1章 導入	1
1.1. 理論的背景と本研究の目的 1	
1.1.1. 言語表現と階層構造 2	
1.1.2. 構造上の位置と解釈 4	
1.1.3. 本研究の主張点と位置付け 6	
1.1.4. 本書の構成 11	
1.2. 否定呼応表現と否定極性項目 12	
1.3. 否定呼応表現に関連するこれまでの分析 17	
1.3.1. 否定要素による c-統御分析 — Klima 1964 17	
1.3.2. Negative Concord 分析 — Haegeman 1995 18	
1.4. 本書の方法論と材料 21	
1.4.1. c-統御関係を鍵とする統語的議論 21	
1.4.2. 議論の道具 23	
1.4.2.1. c-統御関係を探ることが不可能な QP: 束縛変項解釈の場合 23	
1.4.2.2. c-統御関係を探ることが不可能な QP: 作用域解釈の場合 26	
1.4.2.3. 議論に用いる QP 28	

第1部 日本語否定文の構造

第2章 文否定要素 -nai の構造上の位置	31
2.1. -nai の特質 31	
2.1.1. -nai の形態的特質 31	
2.1.2. -nai の意味的特質 32	
2.1.3. 否定の作用域と名詞句の種類 34	
2.1.4. QP と -nai の作用域相互作用 35	
2.1.4.1. 二種類の作用域解釈 35	
2.1.4.2. 二種類の解釈の確認方法 37	
2.1.4.3. 解釈成立における容易さの違い 39	
2.1.5. 否定文の構造 42	
2.2. 日本語の否定文の分析 43	
2.2.1. 普遍文法(Universal Grammar(UG))における否定の構造的な位置 43	
2.2.2. -nai の位置についての仮定 44	
2.2.3. 作用域解釈への説明 45	
2.3. ここで採る仮定とその結果 48	
2.4. 付記1: 日本語否定文のもう一つの分析案 50	
2.4.1. -nai についてのもう一つの案 50	
2.4.1.1. Kuno 1980, 久野 1983 50	
2.4.1.2. Takubo 1985 53	
2.4.2. 作用域解釈への説明 54	
2.5. 付記2: 作用域解釈の容認可能性判断と真理条件 57	
第3章 OS型構文と否定	61
3.1. OS型構文と二つの構造表示 61	

3.2.	Deep DL / Surface DL と否定	64
3.2.1.	否定の作用域に入れない Deep DL	64
3.2.2.	否定に c-統御されない Deep DL	66
3.3.	Deep DL の同定方法	68
3.3.1.	BVA 成立の統語的条件 — Ueyama 1998	68
3.3.2.	作用域解釈の仮説 — Hayashishita 1999, 2004	71
3.3.3.	再述要素 (resumption) — Hayashishita 1997, Hoji & Ueyama 1998, 2003	76
3.4.	Deep DL と否定	79
3.4.1.	BVA 成立と否定の相関	79
3.4.1.1.	分析からの結果と予測	79
3.4.1.2.	検証	80
3.4.2.	分配解釈 (DR) と否定の相関	84
3.4.2.1.	分析からの結果と予測	84
3.4.2.2.	検証	85
3.4.3.	resumption と否定	88
3.4.3.1.	分析からの結果と予測	88
3.4.3.2.	検証	89
3.5.	まとめ	91
3.6.	付記：文の容認性判断による揺れ	92
3.6.1.	否定と BVA が関わる現象についての説明	93
3.6.2.	問題となる現象に対する分析案	94
3.6.3.	仮説の反証可能性と実験結果	97

第 2 部 否定呼応表現生起の構造条件

第 4 章	-nai に c-統御されなければならない否定呼応表現：rokuna-N	99
4.1.	SO 型構文における rokuna-N の分布	99
4.2.	Deep DL になれない rokuna-N	100
4.2.1.	BVA と rokuna-N	101
4.2.2.	resumption と rokuna-N	103
4.3.	rokuna-N 生起の必要条件と分析	104
4.3.1.	-nai による c-統御	104
4.3.2.	QP としての rokuna-N	107
4.4.	rokuna-N の分布への説明	109
4.4.1.	SO 型構文における rokuna-N の分布への説明	110
4.4.2.	OS 型構文における rokuna-N の分布への説明	110
4.5.	まとめ	113
4.6.	付記：-nai 複数位置仮説の場合	114
4.6.1.	SO 型構文における rokuna-N の分布への説明	115
4.6.2.	OS 型構文における rokuna-N の分布への説明	115
第 5 章	-nai に c-統御されない否定呼応表現 (I)：XP-sika	117
5.1.	XP-sika の条件	117
5.1.1.	Deep DL になれる XP-sika	118

5.1.1.1.	BVA と XP-sika	118
5.1.1.2.	resumption と XP-sika	119
5.1.2.	XP-sika の分布上の特徴	121
5.1.2.1.	文否定要素 -nai を要求する XP-sika	121
5.1.2.2.	XP-sika と -nai は同節内要素	123
5.1.2.2.1.	反例に見える例	5.1.2.2.2. major object の要因 — Aoyagi & Ishii 1994
5.1.2.2.3.	格標識の有無	5.1.2.2.4. XP-sika と -nai は同節要素
5.1.2.3.	XP-sika と -nai の一対一対応	132
5.1.3.	これまでの分析	132
5.1.3.1.	Muraki 1978	132
5.1.3.2.	主題(topic)としての分析 — 許斐 1989, 久野 1999	133
5.1.3.3.	Kato 1994	134
5.1.3.4.	Aoyagi & Ishii 1994	136
5.1.3.5.	まとめ	138
5.1.4.	提案	138
5.1.4.1.	5.1.2 で示した XP-sika の分布への説明	142
5.1.4.2.	Aoyagi & Ishii 1994 分析との相違	144
5.2.	XP-sika と QP の作用域関係	147
5.2.1.	分析からの結果と予測	147
5.2.2.	検証(I): SO 型構文の XP-sika と QP	156
5.2.2.1.	XP-sika と QP 1 つの場合	156
5.2.2.2.	XP-sika と QP 2 つの場合	159
5.2.3.	先行分析批判	161
5.2.3.1.	Muraki 1978	162
5.2.3.2.	許斐 1989, 久野 1999	163
5.2.3.3.	Kato 1994, 2002	164
5.2.4.	検証(II): OS 型構文の XP-sika と QP	167
5.2.4.1.	分析からの結果と予測	167
5.2.4.2.	2 種類の作用域解釈	171
5.2.4.3.	OS 型構文と BVA	172
5.2.4.4.	OS 型構文と resumption	176
5.2.4.5.	2 つの QP と XP-sika	178
5.2.5.	まとめ	181
5.3.	XP-sika と rokuna-N	181
5.3.1.	SO 型構文	183
5.3.2.	OS 型構文	184
5.3.2.1.	分析からの予測	184
5.3.2.2.	検証: resumption と rokuna-N と XP-sika	186
5.3.3.	まとめ	189
5.4.	まとめ	191
5.5.	付記 1: XP-sika の条件: -nai 複数位置仮説を採った場合	191
5.5.1.	作用域解釈への説明	192
5.5.2.	5.1.1 の分布への説明	194
5.5.3.	XP-sika と rokuna-N	196
5.6.	付記 2: XP-sika の意味	198
5.6.1.	「XP 以外」との相違: 前提と断定	199
5.6.2.	XP-sika の意味記述と問題点	201

第6章	-nai に c-統御されない否定呼応表現(II): (N-CM) dare-mo/nani-mo	203
6.1.	(N-CM) dare-mo/nani-mo の統語的条件	203
6.1.1.	Deep DL になれる (N-CM) dare-mo/nani-mo	205
6.1.1.1.	BVA と (N-CM) dare-mo/nani-mo	205
6.1.1.2.	resumption と (N-CM) dare-mo/nani-mo	207
6.1.2.	(N-CM) dare-mo/nani-mo の分布	207
6.1.3.	先行分析	209
6.1.3.1.	NPI としての分析	209
6.1.3.2.	Negative Concord 項目としての分析	210
6.1.3.2.1.	Watanabe 2002, 2004 の概要	6.1.3.2.2. Watanabe 2002, 2004 の問題点
6.1.4.	(N-CM) dare-mo/nani-mo の分析案	219
6.2.	(N-CM) dare-mo/nani-mo と XP-sika	220
6.2.1.	検証(I): SO 型構文	222
6.2.2.	検証(II): OS 型構文	223
6.2.3.	Watanabe 2002, 2004 分析の問題点	227
6.3.	まとめ	228

第3部 本書での議論による帰結

第7章	結論と日本語文構造についての帰結	229	
7.1.	否定呼応表現についての結論と否定文の構造	229	
7.2.	OS 型構文の構造と派生についての帰結	232	
7.2.1.	仮定 1: θ 位置での基底生成 — Saito 1992, 2003, Miyagawa 2001	234	
7.2.1.1.	随意移動分析 — Saito 1985, 1992, 2003	234	
7.2.1.2.	A 移動分析 — Miyagawa 1997, 2001	237	
7.2.2.	仮定 2: Deep DL 表層位置基底生成 — Ueyama 1998	239	
7.2.2.1.	Deep DL が不可能な場合	241	
7.2.2.2.	Ueyama 1998 の Saito 1992 への反論	243	
7.2.3.	否定の作用域と Deep DL	244	
7.2.3.1.	A 移動と作用域解釈における多義性 — May 1977, 1985	244	
7.2.3.2.	否定述部による多義性の阻止 — Lasnik & Saito 1991	247	
7.2.3.3.	Deep DL の移動案	248	
7.2.3.4.	派生分析 (derivational analysis) — Saito 2003	249	
7.2.4.	resumption と否定	251	
7.2.5.	OS 型構文の構造と -nai の位置: Ueyama 1998 の仮定の下で	252	
7.2.5.1.	Ueyama 1998 分析の下での Deep DL と否定の作用域	253	
7.2.5.2.	Deep DL と -nai との構造上の位置関係	254	
7.3.	動詞の θ 領域外にある位置についての帰結	256	
7.3.1.	Major Subject と Deep DL	257	
7.3.1.1.	Major Subject	257	
7.3.1.2.	Major Subject と否定	257	
7.3.2.	local disjointness effects (LDE) と否定	259	
7.3.2.1.	local disjointness effects の分析 — Hoji 2001, 2003	259	
7.3.2.2.	local disjointness effects と -nai の作用域	261	
7.3.3.	まとめ	264	
7.4.	おわりに	266	
あとがき	269 / 参考文献	272 / 索引	280

7.2.3.4.	派生分析 (derivational analysis) — Saito 2003	249
7.2.4.	resumption と否定	251
7.2.5.	OS 型構文の構造と -nai の位置: Ueyama 1998 の仮定の下で	252
7.2.5.1.	Ueyama 1998 分析の下での Deep DL と否定の作用域	253
7.2.5.2.	Deep DL と -nai との構造上の位置関係	254
7.3.	動詞の θ 領域外にある位置についての帰結	256
7.3.1.	Major Subject と Deep DL	257
7.3.1.1.	Major Subject	257
7.3.1.2.	Major Subject と否定	257
7.3.2.	local disjointness effects (LDE) と否定	259
7.3.2.1.	local disjointness effects の分析 — Hoji 2001, 2003	259
7.3.2.2.	local disjointness effects と -nai の作用域	261
7.3.3.	まとめ	264
7.4.	おわりに	266
あとがき		269
参考文献		272
索引		280

第1章 導入

一般に、我々人間は「ことばを話す」とか「ことばがわかる」と言われる。それは、人間であれば誰しも食べ物を口にすると同様に、ごく当たり前の営みと見なされている。では、なぜ我々は、そのように言語を使用することが可能なのであろうか。本研究は、人間には言語を司る機能が備わっていると仮定した上で、その言語能力がどのようなメカニズムを有しているのかを探る試みの一つである。

本研究がその拠り所とするのは、アメリカ合衆国の言語学者 Noam Chomsky により提唱された生成文法 (generative grammar) と呼ばれる言語理論である。¹ 生成文法理論においては、人間には普遍的且つ生得的に言語機能 (language faculty) が備わっていて、その機能が後天的な言語環境からの刺激を受けて成熟した状態になることで、言語能力が活性化し言語使用が可能になると仮定する。その言語能力のメカニズムの解明が生成文法理論に基づく言語研究の目的である。

本書では、言語能力の働きが従っているとされる一般的原理が日本語の否定文に関わる現象を通して確認できることを示し、更にそれらの日本語の現象においてどのような原理がどのように働き日本語固有の特質とどのように関連し合うかを探ること、言語能力の特質を解明するための一歩としたい。

本研究での議論の前提となる仮定や特別な用語の概念は、必要に応じて、本論の途中でも説明を加えて行くが、議論に先立って、この章では、本研究の理論的背景や全体を通して議論の鍵となる概念を、少し説明した上で、この論文の目的を述べておく。

1.1. 理論的背景と本研究の目的

この節では、生成文法理論に基づいて言語能力のメカニズムを探っていく研究が、実際にどのような道筋で進んでいくのかを、本研究に関連する具体例を挙げて説明し、同時に本論文では何を探り、そのために何を明らかにしていくかを明確にしておく。

本研究で議論の材料として用いる言語現象は、日本語の否定に関わる現象である。否定に関連する表現における、ある解釈成立の可能性や、その表現そのものの容認可能性を、論証のための材料とする。以下で、議論の進め方の要点を述べるとともに、

¹ 以下、生成文法理論上の専門的用語の日本語訳や簡単な概説は、一般に使われているものの他、『チョムスキー理論辞典』(1992年研究社、原口庄輔・中村捷編)、『岩波講座 言語の科学 6 生成文法』(大津由紀雄他編)を参考としている。

そのような方法で日本語の否定に関連する現象を見ることが、なぜ言語能力のメカニズムや働きを探ることにつながるのかを述べておこう。

1.1.1. 言語表現と階層構造

まず、以下の例を見てほしい。

(1) 厚くて重くない本

この表現は、「厚くて」・「重く」・「ない」・「本」という複数の言語表現が組み合わされて構成されているということが、日本語話者であれば感じ取れるはずである。これらのうちの幾つかを別の語に代えて、異なった表現を作り出すことが容易にできることから明らかであろう。

- (2) a. 薄くて重くない本
- b. 厚くて重くないコート

このように、言語表現はより小さい単位がいくつか組み合わさって大きい単位を成していくことで構成されているのであるが、単に、それらの要素が線的に繋がっているのではなく、階層的な構造を成していると考えられる。例えば、(1)の表現は、以下のように二通りに解釈することが可能である。

- (3) a. 「厚く且つ重い」という特質を持たない本。「厚い」という特質は持たなくともいい本。
- b. 「厚い」という特質且つ「重くない」という特質の両方を持つ本。「厚い」という特質は必ず持っていなければならない本。

この意味の違いが導かれる要因については、次のように考えられる。(3a)の場合は(4)のように、「厚くて」と「重く」がまず一つの単位を成して、それに「ない」が組み合わされてより大きい単位をなす。一方、(3b)の場合は(5)のように、「重く」と「ない」がまず一つの単位を構成し、それに「厚くて」が組み合わされてより大きい単位を成している。

第1部 日本語否定文の構造

第2章 文否定要素 -nai の構造上の位置

否定呼応表現と -nai との構造上の相対的位置関係を調べるにあたって、この章ではまず、-nai の絶対的位置についての議論を行い、本研究で採る仮定を述べる。-nai の持つ特質を確認し、QP と -nai との作用域関係を調べることで、どのような仮定が適切であるかを見る。

2.1. -nai の特質

2.1.1. -nai の形態的特質

日本語の文否定要素である「-ない」は、以下のように、動詞(及び形容詞)に常に後続する接辞であり、それだけで独立に生起することができない。^{1, 2}

- (1) a. 太郎は誕生日に花子を呼ばない。
b. 花子はあるに美しくない。

また、(2)と(3)を見ればわかるように、「-ない」そのものは形容詞と同じ形態的变化をするという特質がある。

- (2) a. 太郎が誕生日に花子を呼ばなければ、花子は気分を害するだろう。
b. 太郎が誕生日に花子を呼ばなくなったので、花子は気分を害した。
c. 太郎が誕生日に花子を呼ばなかったので、花子は気分を害した。

¹ 現代日本語の文否定要素には他にも「-ぬ(ん)」「-ず」がある。前者は丁寧表現「-ます」の否定形に用いられる。後者は文語的で、慣用句などにも残されているが、どちらも使用される場が限られているので、本研究では「-ない」だけに限る。

- (i) わたしの言ったことは嘘ではありません。
(ii) あの歌手は10年間、鳴かず飛ばずだった。

² ただし、存在を表す動詞「ある」の否定形とみなされる「ない」は単独で一つの述語として働く。

- (i) 冷蔵庫にあったはずの私のケーキがない。

現代の日本語においては「ある」に否定辞 -nai が付加した形式「あらない」は存在せず、その代わりに「ない」が用いられている。その歴史的経緯については、小林 1968(2000)などで論じられているので参考にしてほしい。

第3章 OS型構文と否定

この章では、いわゆるかき混ぜ文と呼ばれる「目的語-主語-動詞」語順文を調べて、日本語否定文には、LFにおいて-naiに決してc-統御されることのない要素が存在しうること、つまり否定文にはLFにおいて-naiの領域に入ることのない要素が存在することが可能で、そのような要素が存在する構造上の位置がありうることを主張する。

まず、かき混ぜ文の文頭にある目的語名詞句が、その成立する解釈ゆえにLFにおいてもその前置された位置を占めると考えざるを得ない場合、-naiの作用域内で解釈されることが不可能であることを見る。ある要素の作用域はその要素のLFにおけるc-統御領域であるという仮定があるので、その場合の目的語名詞句はLFで-naiにc-統御されることのない要素であり、-naiにc-統御されない位置を占めるという分析を提示する。その次の節では、「目的語-主語-動詞」語順文において、目的語がLFにおいてもその前置された位置を占めている場合を同定する方法を紹介する。その上で、それら一つ一つが否定文になった場合、その目的語が-naiの作用域内で解釈されることが不可能であることを示して、その目的語がLFにおいて占める位置が-naiにc-統御されない位置であるという仮定が正しいことを示す。

かき混ぜ文に関しては、LF構造表示が複数可能であるとされていて、それらのLFがどのようにして派生するかはまだ決着のついていない問題である。それについては第7章で論ずるが、ここで論ずる前置目的語が否定に関して見せる特質は、かき混ぜ文についてどのような分析を採るかには関わらず確認できるものである。本章の議論及びそれに基づいたその後の否定呼応表現についての議論は、かき混ぜ文の分析に関わらず成り立つものであることを断っておきたい。

3.1. OS型構文と二つの構造表示

日本語の「主語-目的語-動詞」語順を持つ文(NP-ga NP-o/-ni V)の例から、まず見てほしい。以下ではUeyama 1998に従って、この語順の文をS(ubject)-O(bject)型構文と呼ぶことにする。

- (1) a. 5つ以上の銀行が[そこの取引先]に日産を推薦した。
OK BVA(5つ以上の銀行, そこ)
- b. [そこの取引先]が5つ以上の銀行に日産を推薦した。
* BVA(5つ以上の銀行, そこ)

第2部 否定呼応表現生起の構造条件

第4章 -nai に c-統御されなければならない

否定呼応表現：rokuna-N

この章では、日本語否定呼応表現の一つである「ろくな-」という表現を調べる。この表現は名詞に付いて名詞句を構成するので、以下では rokuna-N と表すことにする。前章で得られた OS 型構文を用いた方法で、rokuna-N が Surface DL にはなれるが Deep DL にはなれないことを示し、rokuna-N が LF において -nai に c-統御されなければならないことを示す証拠の一つとする。そして、rokuna-N の他の特質を考察した上で、あらためて、その生起のための必要条件として、LF において -nai に c-統御されなければならないということを提案する。

4.1. SO 型構文における rokuna-N の分布

この節ではまず、SO 型構文における rokuna-N の分布を見る。

rokuna-N は、以下のように、否定要素が存在しなければ現れることができない。

- (1) a. [_S ... rokuna-N ... V-nai]
b. * [_S ... rokuna-N ... V]
- (2) この大学にはろくな学生が来ない。
- (3) *この大学にはろくな学生が来る。

単に否定要素と共起するというだけではなく、文否定を成す要素-nai を必要とする。

- (4) a. *この大学はろくな学生が不合格だった。
b. この大学はうちの高校で一番の学生が不合格だった。

同節内に-nai が存在すれば、主語位置でも非主語位置でも現れることが可能である。

- (5) a. ろくな男が花子に電話をかけて来ない(理由)
b. ろくな男が花子を好きにならない(理由)
- (6) a. 太郎が花子にろくなものを買ってやらない(理由)
b. 花子がろくな場所へ行かない(理由)

第5章 -nai に c-統御されない否定呼応表現 (I): XP-sika

この章では、日本語の「-しか」を用いた表現について論ずる。この表現も、否定要素とともに現れることを必要とし、日本語の否定研究において、最も頻繁に研究対象として取りあげられてきた否定呼応表現である。これについては、否定極性項目 (NPI) であるという仮定の下、やはりその生起のためには LF において -nai に c-統御されなければならないという分析がある。しかしながら、ここで仮定している OS 型構文の分析を前提として、OS 型構文におけるその分布を見ると、LF で -nai に c-統御されることのない Deep DL に現れることが可能であることがわかる。それにより、「-しか」句は LF において -nai に c-統御されることがその生起のための必要条件ではないということを、まず示す。そして、その分布を見直した上で、その生起のための必要条件として、「-しか」句と -nai が LF において指定部-主要部 (Spec-head) の位置関係になっていなければならないことを提案する。つまり、「-しか」句は LF において -nai に c-統御されるべき表現ではなく、逆に「-しか」句が -nai を c-統御していなければならないということを主張する。

5.1. XP-sika の条件

この節では、「-しか」が付加された「-しか句」について調べ、その生起のための構造上の必要条件を提示する。

「-しか」は、日本語において、助詞として扱われていて、取り立て助詞と呼ばれている。¹ 以下のように、名詞句だけではなく、動詞句、副詞句、形容詞句など様々な範疇の句に後続して用いられる。

(1) 名詞句につく例

- a. [昨日の理事会で]しか 田中さんは この案に 賛成しなかった。
- b. 昨日の理事会では [田中さん]しか この案に 賛成しなかった。
- c. 昨日の理事会では 田中さんは [この案に]しか 賛成しなかった。
- d. [東京へ行った時]しか 人形焼きは 買えません。

(2) 動詞句につく例

昨日の理事会で 田中さんは [この案に賛成する]しかなかった。

¹ 『基礎日本語文法 - 改訂版 -』 (益岡隆志・田窪行則 1992、くろしお出版) 第 III 部、8 章 参照。

第6章 -nai に c-統御されない否定呼応表現(II): (N-CM) dare-mo/nani-mo

この章では、日本語の「だれも、なにも」という表現について論ずる。この表現も、否定要素とともに現れることを必要とし、日本語の否定研究において、「-しか」と並んで頻繁に研究対象として取りあげられてきた表現である。そして、この表現についても、いわゆる否定極性項目(NPI)であるという仮定の下、その生起のためには LF において -nai に c-統御されなければならないという見方がより一般的に受け入れられている。

この章ではまず、かき混ぜ文(OS 型構文)におけるその分布を見て、LF で -nai に c-統御されることのない位置を占める Deep DL になることが可能であることを見る。それにより、LF において -nai に c-統御されることがその生起のための必要条件ではないということを示す。そして、その分布や意味的特質を見直した上で、その生起のための必要条件としては、LF において -nai に c-統御されなければならないのではなく、-nai を c-統御していなければならないという条件を提示する。その条件が正しいことを示すための議論として、XP-sika と共起した場合の分布を調べ、ここで提示する分析を採るべきであることを主張する。

6.1. (N-CM) dare-mo/nani-mo の統語的条件

「だれも、なにも」という表現は、一般に不定語と呼ばれている(益岡・田窪 1992, Kuroda 1965)。¹ 名詞句に付加された形でも現れるが、単独でも用いられ、やはり文否定要素 -nai を必要とする。

- (1) (学生が)だれも 新聞を 読まない。
- (2) *(学生が)だれも 新聞を 読む。
- (3) *今年の入学試験は(現役高校生が)だれも不合格だ。

- (4) 我が家では、太郎が(朝食を)何も食べない。
- (5) *我が家では、太郎が(朝食を)何も食べる。

¹ 益岡・田窪 1992 第 II 部第 7 章では「だれも、なにも」の類を疑問語に「-も」が付加したものとし、それを不定語と呼ぶ。Kuroda 1965, Chapter III では、「だれも、なにも」を不定代名詞(indeterminate pronoun)に「-も」が付加したものであるとしている。